

特 許 抄 録

第十九卷第十一號 昭和八年十一月

コンクリート製造方法

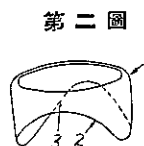
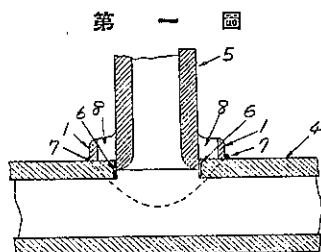
(特許第 101924 號 特許權者(發明者) 武居佐源次氏)

本發明はセメントの水泥液中に電流を通しながら攪拌混捏するコンクリート製造方法であつて、コンクリート製造中に急速に且つより多い加水分解をさせて、硬化の早いコンクリートを得るのを目的としたものである。實施の一例として、セメント 1、砂 2、砂利 4、水適當の割合で攪拌混捏し、これに 100 ボルトの電流を通すものである。

鉛管の枝管接合法

(特許第 102252 號 特許權者(發明者) 青木了氏)

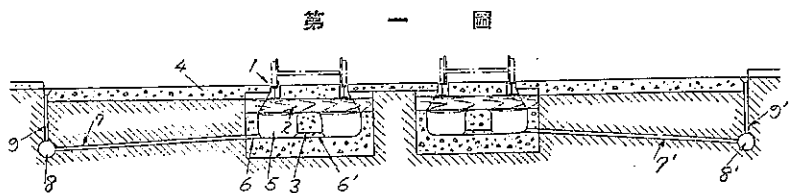
本發明は鉛管の主管に枝管の挿入すべき孔を穿ちこの孔周に加熱に依つて膨脹し鉛の管内流出を防止する資料(6)を施して枝管を密接させ(第一圖)、その枝管と主管の接合面に鉛のカバー(1)を被ひ(第二圖)、その主管との接觸面に鉛の外部流出を防止する資料(7)〔例へば酸化亜鉛〕を施した後外部から加熱しながら鉛を液相線以上の熔融状態で熔填させる方法である。



電車軌道装置

(特許第 102272 號 特許權者(發明者) 延原觀太郎氏)

本發明は卸裝路面電車の軌道に應用するもので枕木(2)とその臺盤(3)との間を空室(5)にし、これに枕木を橋架する裝置で、電車の進行の際枕木が適度に撓曲して緩衝作用を行ひ、且つ軌道地下の汚水のポンプ作用を防止させるのを目的としたものである。

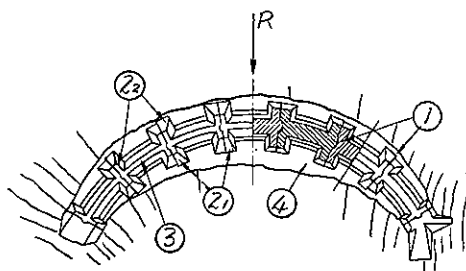


耐震単拱連接堰堤

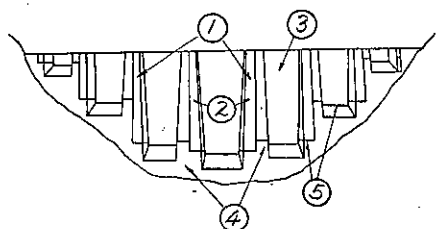
(特許第 102269 號 特許權者(發明者) 熊川信之氏)

本發明の單拱連接堰堤は各單拱 (3) の兩端に位して水壓面側(上流側)及び反水壓面側(下流側)又はその孰れか一方の側に突壁 (2) [(2₁), (2₂)] を設けたものである。従つて各單拱の平面は I 形又は溝形となる。下流側の突壁 (2₁) は主として上流側から襲ふ地震分力に對抗させて拱の顛倒を防ぎ同時に拱の縁維應力を減じ、拱の上流側の突壁 (2₂) は主として下流側から襲ふ地震分力に對抗させるのである。

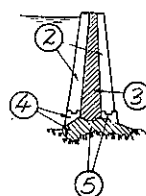
第 一 圖



第 二 圖



第 三 圖

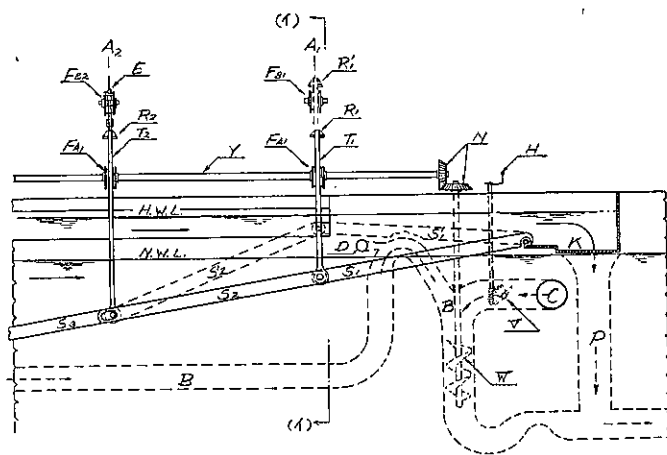


自動塵除スクリン

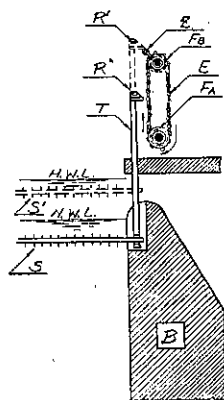
(特許第 102280 號 特許權者(發明者) 喜多權次郎氏)

圖面に就いて本發明を説明すると、塵除スクリン (S₁), (S₂), (S₃) 等を水流に沿ふて縦列に設け (第一圖参照)、各スクリンは上下に波動運動を爲す様に關節で連結してゐる。波動運動は次の如くに行はれる。餘水の一部又はスクリンに浮遊物が密着して水位が N. W. L. 以上になると、サイホン管 B の空氣孔 (D) が沈没し従つてサイホンが働き、管中の水車 (W) が廻轉し齒車に依り傳導桿 (Y) が廻轉する。従つて鎖 (F) が廻る (第二圖参照)、この時鎖の鉤 (Z) が桿 (T) の突起を引き掛け徐々に桿 (T) を引き上げ頂點で離し桿 (T) を急に落す。従つてスクリン (S) も落下する。この運動は各鎖の鉤の位置を變へておけば順次上流から下流へ繰返しスクリンに波動運動を起させる事になる。この運動の爲スクリンに附いてゐた浮遊物は水の爲に掬ひ取られてスクリンから離れ水速の爲、下流のスクリンに移動附着する。斯くて浮遊物は最終端のスクリン (S₁) から水と共に放流路 (K) を通り (P), (L) を經て水路外へ放流するのである。

第 一 圖



第 二 圖

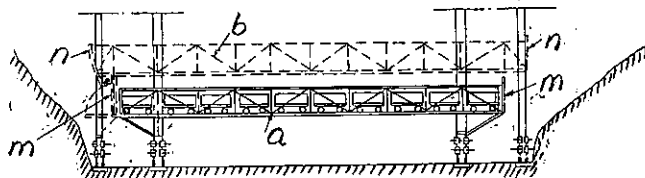


引 上 げ 運 搬 方 式

(特許第 102333 號 特許権者 (發明者) ヨハネス・カールマン氏)

本發明は軌條を横切る方向に延長した運搬桿に依つて貨車を傾斜軌條上に沿ふて引き上げる運搬方式に於て、同一傾斜面を利用して 2 組の軌條を敷設し、一つの運搬桿 b を門狀とし、他の運搬桿 a を跨ぎ得る様にしたものである。

第 一 圖

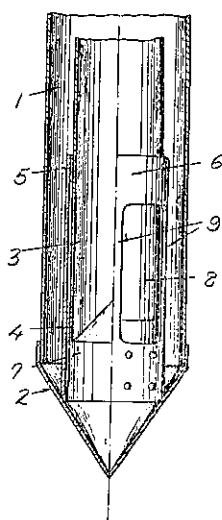


コ ン ク リ ー ト 杭 の 築 造 装 置

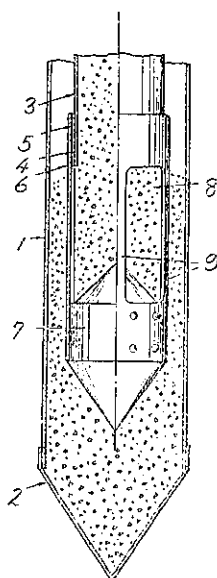
(特許第 102363 號 特許権者 (發明者) 箱根正彦氏)

本發明は内管 (3) の下端部外周に懸止帶環 (4) を繞着し (第一圖参照)、この環を懸合する受留帶環 (5) を上端部内側に装着してゐる所の摺動管 (6) の下端部内側には上下端に尖頭を有してゐる底金 (7) の周壁を固定させ、この摺動管 (6) の周壁には 2 個又はそれ以上の透孔 (8) を穿つたもので、これを地中に打込んで内管中にコンクリートを填充し内管を上げると懸止帶環 (4) は受留帶環 (5) に懸り (第二圖参照) 透孔 (8) が開くからコンクリートが内管から外管に放出する。然る後内管を下降させると透孔 (8) が閉鎖される。放出量が適量となつた後内管上部に打撃を加へ徐々に外管を上方に引抜きながらコンクリートに壓力を加へて膨大部を作り、この部分が出来れば後はコンクリートを補充して前記の方法を繰返し所要の幹柱部を作るのである。

第 一 圖



第 二 圖



含水瀝青乳劑製造竝にその使用法

(特許第 102401 號 特許權者(發明者) 石川岩雄氏)

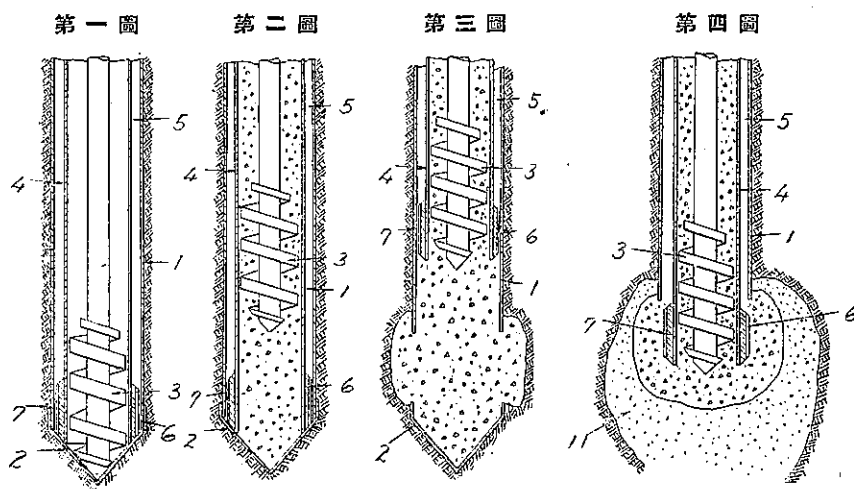
本發明は石鹼及び 磷酸曹達を サポニン質物の稀薄水溶液に分散させて出来る乳化劑と熔融アスファルトを攪拌混合する事に依り鋪裝工事現場で含水瀝青乳劑を製造し、これを保温の儘直ちに鋪裝面に撒布し或はこれを適當の骨材と混合攪拌後鋪裝する方法である。

コンクリート杭築造装置

(特許第 102451 號 特許權者(發明者) 箱根正彦氏)

本發明は内外二重管から成るコンクリート杭築造装置であつて、内管内に螺旋を有する心棒(3)を挿入し、内外兩管間には壓縮氣體を送入し得る様構成しこれ等全體を組合して地中に打込み(第一圖参照)、然る後一旦心棒のみを抽出して内管内にコンクリートを充填し次に心棒を或る深度迄旋入させる(第二圖参照)。この前後に於て内外兩管間に必要に應じて壓縮氣體を送入した後、心棒を壓して内管を心棒の先端に近い個所迄引抜く時は内管内のコンクリートは外管内に放出され、心棒先端以上にある内管内のコンクリートは螺旋に依つて内管内に残留する。この状態で内管及び心棒に同時に打撃を與へる時は第三圖の如くなる。次に心棒の基端を抑へずに螺旋し保持するコンクリートの一部をその儘内管内に残留させ内管をその先端が再び心棒の先端附近に達する迄抽出し、再び内管及び心棒に打撃を與へ乍ら外管を徐々に抽出するのである(第四圖参照)。

以上の様な装置に依つて本發明は地下水中であつても容易にコンクリート膨大部を築造し様とするのである。



粉末ピッチを使用する事によるアスファルト舗道施工法

(特許第 102469 號 發明者 磯部甫氏 特許權者 理化學研究所)

本發明は碎石、砂、土壤等の基礎上にコールタール系の油例へばコールタール中油、重油等を用ひ、又は石油系の油例へば瀝油、重油又は機械油等の油又はその乳劑を注加又は塗布してその表面に油を充分に滲透させ、次にその油層上にコールタール系の油を使用したものには石炭系のピッチ粉末を又石油系の油を用ひたるものには石油系のピッチ粉末を粘土、陶土、白土、硅藻土又はセメント等の様な微粉末か或は砂と共に撒布し若くはその上に更に碎石を撒布し、又は豫めピッチ粉末と上記の油及びその他の鑛物資料との混合物を鋪設する施工法であつて、加熱操作を要せず常溫のまゝで簡易に施工し、短日中に充分固結し得る鋪道を目的としたものである。

セメント防水劑

(特許第 102496 號 特許權者 (發明者) 渡邊鶴吉氏 木原當次郎氏)

本發明は滿侖鑛母岩の分解物である可溶性珪酸及び珪酸鐵を多量に含んだ灰黑色の岩石又はその風化物の細末に燒明礬及び石膏を混合密和したセメント防水劑であつて、セメントの凝固を阻害せず且つ龜裂の憂なき製品を目的としたものである。

アスファルト・コンクリート混合物の製造法

(特許第 102512 號 發明者 森豐吉氏 市川良正氏 特許權者 日本石油株式會社)

本發明は冷骨材及び熔融アスファルトを滑合しながら高熱火焰と臨時的に反復接觸させる事に依つてアスファルトの本質を破壊する事なく冷骨材の表面にこれを展開被覆せしめる方法であつて、從來の乾燥裝置を省略し得るものである。